外国につながりのある人たちへの看護ケア
—異文化との出会い42病院マップの開発と活用—

○野地有子[1]、野崎章子[1]、溝部昌子[2]、近藤麻理[3]、小寺さやか[4]、飯島佐知子[5]
[1]千葉大学大学院看護学研究科、[2]西南女学院大学、[3]関西医科大学、[4]神戸大学、[5]順天堂大学

【目的】本研究は、外国につながりのある人たちへの看護ケアを推進するために、異文化との出会い42病院マップを開発し、病院、看護系大学、保健所において試用し、活用方法について検討することを目的とした。

【方法】本研究は、研究１および研究２の２段階で実施した。

研究１：無記名自記式アンケートの中の「外国人患者の対応で困ったこと」自由記載の回答4,738件の分析から抽出された看護職のカルチュラル・コンピテンスの能力開発領域に含まれる事例42を用いた「異文化との出会い42病院マップ」を開発した。

研究２：看護職のカルチュラル・コンピテンス能力開発に向けた、病院マップの活用方法を検討するために、２病院、１看護系大学、１保健所管内において試用し、「異文化の人の習慣や文化などについてもっと知りたいと思う」ほか５問のリッカート式設問と記述式設問および自由記載からなる無記名自記式アンケートを実施した。マップの読みとりと回答あわせて、およそ30分程度であった。

倫理的配慮のうえ、実施施設、参加者の同意を得て、2018年10月～12月に実施した。

【結果および考察】

１．マップの開発は研究班の編集委員会で検討し、事例42をイラストにて病院マップ図に配置し、全てに看護師の回答からなるキャプションをつけた。また、開発の目的、用語解説、マップの構造、活用方法３ステップ等の内容で構成した。先行研究参加病院（195件）に配布した。

２．試用した２病院（A、B）のアンケート参加者は、看護師それぞれ23名と39名（計62名）であった。看護系大学において、学部生57名の回答がみられた。保健所管内からも試用のニーズがあり１保健所管内43名の保健師の回答があった。回答者合計は、162名であった。「異文化に関心がある」に大変そう思うは、A病院65.2%、B病院35.9%、看護学生61.4%、保健所44.2%であった。「イラストは効果的か」に大変そう思うは、A病院70.0%、B病院64.1%、看護学生79.0%であった。保健所保健師からも、場面のイメージがしやすい、いざという時を想定しやすいなどの記述があった。異文化理解のレディネスが異なっていても、イラストを活用したマップの活用効果が示唆された。本マップの多様な活用方法および、地域の事例からなる地域マップの開発にいかすことができる。

（本研究は文部科学省科学研究費助成事業基盤研究（A）（一般）25253107（H25-28）および（A）（一般）17H01607（H29-33）の研究費助成を得て実施した）

研究班編集委員：大友英子、小林康司、坂元眞奈美、浜崎美子、相原綾子、池袋昌子、西山正恵望月由紀、別府佳代子、進士遥、炭谷大輔、米田礼